78　国立国会図書館所蔵『体雅』について

竹内　尚
日本鍼灸研究会

【緒言】国立国会図書館所蔵の抄本，『体雅』（244-236）は，江戸後期の考證医家・多紀元胤が身体部位名について各種文献の用例を列挙して考證した，身体部位名辞典とでもいうべき書である．『体雅』には，国内外に12本の伝本が確認されているが，未だ底本は定まっていない．本発表では，『体雅』伝本の一つである本書の書誌を中心に解説し，『体雅』および江戸後期の考證医家研究の一助とする．

【書誌について】本書は三巻一冊，巻一67葉，巻二47葉，巻三34葉の都合148葉より成る．書形は縦23.5 cm×横16 cm．外題は「体雅」と表紙に直接墨書されている．小口に「劉柳湾先醒体雅」と墨書されている．内匡郭寸は縦16.9 cm×横12.8 cm，左右双辺有界，毎半葉10行，行16字，版心白口，上黒魚尾，魚尾下に「体雅巻幾」及び葉次を墨書，匡郭左下に「金花堂」と刻す藍印の用箋を使用している．

見返しには，「浸庭先生曰，赤青黒之三等，皆如原本．只赭之一色，新補也．△素行所訛也」と識語がある．巻首に「体雅巻一，東都丹波元胤紹翁纂釋」と題し，以下本文および双行注を墨書，読点及び傍線は青書，本文の抹消線は朱書，文字の訂正は茶書している．

一葉目匡郭左に「慶応紀二稔丙寅三月十二日，源亀州生」とあり，以下数葉毎に匡郭左に「十三日」「十四日」等と書写日を記す．九十三葉目に「半葉卅日」とある後，九十六葉目に「半葉五月七日，此節眼病休止」とある．その後再び書写日の記載は続き，巻末の百四十八葉目表に，「右体雅一書．従浸庭森先生侑而来．慶応二龍集柔兆攝提格．黄梅時節家々雨中念一日写了．亀州陳人拝記」と識語が有る．それに続けて「龍飛丙寅稔，暮秋玄月希望十四夜雨中．新雁為群鳴実推故情於横渠起．居万巻書屋中，一校読了．素行伊沢信実又記」との識語も有る．また巻一末に「文化甲戌孟春起稿，至于明年菖月，使及門木田賢謄次．是月廿八日再訂．胤記.」「文政壬午夏五月初九日，再重訂．胤又記」，巻三末に「乙亥菊節覆訂胤」「壬午五月十日刪改胤又記」とそれぞれ元胤の識語がある．

【内容について】本書は，首，髪，頭など239の項目を挙げ，その名義を『素問』『霊枢』『説文』『釈骨』などを主に，およそ百六十もの文献を引用し考證する．時に元胤の案語を付す．身体上部より下部へ向かう構成となっており，首より始まり足心にて終わる．行頭より項目名を記し，改行し低一格で注文を記す．本文には青筆にて読点をうち，書名及び人名には青筆で傍線を付す．また随所で引用文を朱線にて削除している．頭注も散見され，本文の校正を行う他に，案語も記されている．案語には「実按」，「浸庭先生曰」，「立夫先生曰」，「枳園先醒曰」，「渋江抽斎曰」がそれぞれ確認される．

【考察】本書の写人と思われる源亀州生なる人物については未詳であるが，書中の識語より慶応二年三月十二日に本書の書写に着手し，連日数葉ずつ書写するも三月三十日より眼病にて休止，五月七日より再開し，五月後半頃に写了した事がわかる．巻末識語に見える素行伊沢信実は，伊沢榛軒の養子・棠軒の事と思われる．また本書の用箋「金花堂」であるが，写人の堂号か，或いは日本橋通四丁目の書肆・金花堂（須原屋佐助）であるかとも考えられる．

【結語】『体雅』の様な身体部位の研究書は希有であり，今日でも経穴研究等に欠かすことができない一書である．本書は『体雅』成立から半世紀余を経た江戸末期の写本であるにもかかわらず，原本を彷彿とさせる校正の名残を色濃く残している．また伊沢信実のほか，渋江抽斎や森立之・約之らの諸家注も加えられた本書は，『体雅』研究には欠かせぬ一書であるといえよう．